

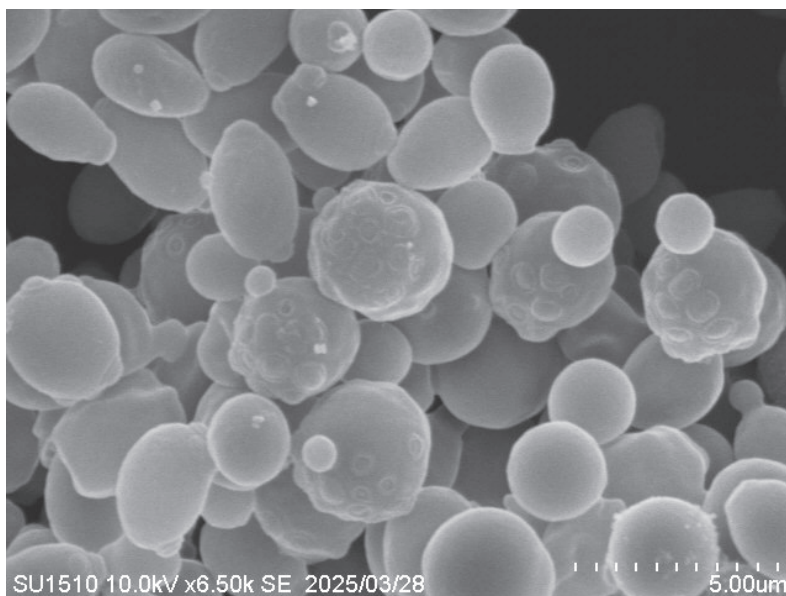
日本菌学会ニュースレター

Newsletter of the Mycological Society of Japan

2025-3 (7月)

目次

巻 緒 言: 会長就任のご挨拶	玉井 裕	1
お知らせ: 菌学会からのお知らせ 日本菌学会写真プロジェクトに応募しましょう ..	細矢 剛	2
随 想: 会長退任にあたって	細矢 剛	4
紹 介: ABSの現場から一芽依と悠翔の実践記ー その1	寺嶋芳江	6
学会記事: 理事会報告		9
学会記事: 理事会報告		9
学会記事: 代議員総会報告		11
学会記事: 会員消息		21



コナラの樹液から分離された *Saturnispora zaruensis* JCM 1515^T

理化学研究所バイオリソース研究センター微生物材料開発室 (RIKEN BRC-JCM, 以下JCM) では, “生きている微生物株” (カルチャー) の収集・保存・提供を行っています。好気性細菌, 嫌気性細菌, 放線菌, アーキア, 糸状菌, 酵母, 酵母様藻類などを合わせた公開株数は20,823株, このうち糸状菌は3,037株, 酵母類は2,937株です (2025年5月末現在)。

上図は, JCMが保有する子囊菌酵母*Saturnispora zaruensis* JCM 1515株の電子顕微鏡画像です。YMブロス培地中, 23°Cで4日培養したカルチャーで, 多極出芽

している様子が観察されます。*S. zaruensis* JCM 1515株は, 1965年に筑 (ざる) ケ岳 (山梨県側) のコナラの樹液から分離されたそうで (Nakase & Komagata 1966 *J. Gen. Appl. Microbiol.*), 本種は樹液酵母の1種と考えられます。筆者もコナラの樹液から*Saturnispora*属の酵母を分離したことはありますが, まだ*S. zaruensis*には出会っていません。いつの日かJCM 1515株の故郷を訪ね, *S. zaruensis*の再分離に挑戦してみたいものです。

遠藤力也 (理化学研究所バイオリソース研究センター)

会長就任のごあいさつ

玉井 裕
(一般社団法人日本菌学会 会長)



このたび、日本菌学会会長を拝命いたしました玉井でございます。身に余る光栄とともに、その重責を痛感しております。ここに謹んで就任のご挨拶を申し上げます。

来る 2026 年に日本菌学会は創立 70 周年という大きな節目を迎えます。これまで多くの先人の努力と会員の皆様の熱意に支えられ、菌学の研究と交流の場として発展を遂げてきました。この歴史を胸に、私も微力ながら学会のさらなる発展に尽力してまいります。

菌類は地球上で最も多様性に富む生物群であり、生態系の物質循環における重要な役割を果たすのみならず、農業・環境保全・医療・産業応用においても欠かせない存在です。近年の分子生物学やゲノム解析の進展により、菌類の未知なる機能や可能性が次々に明らかになり、菌学の重要性はますます高まっています。

今後は、創立 70 周年を契機として、学際的な研究交流を一層促進し、若手研究者の育成支援を強化するとともに、多様な分野の融合を推進していきたいと考えています。また、研究成果の国内外への発信を積極的に行い、菌学の魅力と価値をより広く社会に伝えていくことも重要な使命と捉えています。



会員の皆様には、これまで以上に学会活動への積極的なご参加とご協力をお願い申し上げます。皆様と共に日本菌学会の未来を切り拓き、学術的な発展と社会貢献を両立させる学会を目指してまいります。

結びに、会員の皆様のますますのご活躍とご健康を心より祈念し、就任のご挨拶といたします。

E-mail: ytamai@agr.hokudai.ac.jp (玉井 裕)

菌学会からのお知らせ 日本菌学会写真プロジェクトに応募しましょう

細矢 剛

(国立科学博物館 植物研究部)



日本菌学会ではオープンサイエンスの実現に向けて、いわゆる FAIR 原則 (<https://biosciencedbc.jp/about-us/report/fair-principle/>) に則った活動を展開しています。その一層の推進に向けて、このたび、公益財団法人発酵研究所より、500 万円の資金を獲得し、その一部を使って「学会員による教育的資源の収集と共有」を実施しています。

本事業の目的は、「きのこやカビなど、教育的な視点で価値があると考えられる画像や動画（代表的なカビやきのこの画像、菌根や付着器、遊走子の写真など、実物の写真、分離や実験操作の動画、など）を学会員からの提供をもとに収集し、ホームページから公開・共有する」というものです。

これまで、菌類に関して教育現場で利用できる画像や動画データは、大学などにおける専門教育の場合ばかりでなく、小・中・高の学校教育現場においても限られていました。本課題は、学会員の協力を得て、教育で活用できるような写真・動画（きのこの写真ばかりでなく、菌糸、コロニー、菌根、微細構造、採集・分離方法など、研究活動や形態などをイメージできるもの）を使いやすく整理し、オープンなライセンス（CC-BY-NC 相当）のもとにホームページから公開し、教育・研修現場などで利用してもらうことを目的としています。これは、著作権者を引用すれば、商業利用以外に自由に使用できることを許可する記号です（商業利用の場合は、別途許諾が必要となります。詳しくは <https://creativecommons.jp/licenses/> 参照）。これによって、教科書に出ているような専門用語を実物で見ることが身近になり、菌学の普及と後進の育成に大きく貢献することを期待しています。

以下に募集の詳細を記しますので、奮ってご参加ください。なお、写真収集サイトの使い方を、日本菌学会の Youtube チャンネルの動画 (<https://youtu.be/Iu2adLneHrY>) で示しています。合わせて御覧ください。

1. まず、以下の Google form による写真収集サイト (<https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSdD-L->

[IJsJRpahqsYJ2WnBm5C4hx1dCia3dYIHkx6olXi1ZlA/viewform](https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSdD-L-IJsJRpahqsYJ2WnBm5C4hx1dCia3dYIHkx6olXi1ZlA/viewform)) にアクセスしてください。

2. 現在のところ、次の4つのテーマを設定しています(上記のフォームの中にあるアンケート結果により、さらにテーマを増やす予定です)。

T1. 目で見える菌学用語集 [菌学用語集にでてくる単語の実例を示す写真] (例: 厚壁孢子, 担子器, 子嚢, クランプコネクション, 遊走子, etc.)

T2. 菌類の全分類群の多様性 (全目・全科の写真) [全菌類にわたり, すべての目・科の写真を集めます] (例: アカキクラゲ目の代表 *Dacrymyces stillatus*, etc.)

T3. 多様な菌類の生活 [いろいろな環境 (ハビタット) で生活している菌類の写真] (例: マツ林とマツタケ; イネいもち病, etc.)

T4. 日本菌類百選 [「日本菌類百選」 <https://www.mycology-jp.org/html/top100.html> で紹介されている菌類の写真] (例: タマゴタケ, イボテングタケ, ツチグリ, etc.)

3. 次の要領で、写真をアップしてください。わかりやすいように Youtube チャンネルに使用法の動画をアップしました (<https://youtu.be/Iu2adLneHrY>) ので、御覧ください。

1) 最初に示されるのは本事業の説明です。よく読んでいただければと思います。そのまま下にスクロールすると、応募規約ができますので同意してください (同意しないと先に進めません)。

2) 次に出てくるのが応募者のお名前を記入する欄です。

3) 次に、問い合わせなどに使う連絡先のメールアドレスを記入してください。このメールアドレスは間違いがないように 2 回同じものを入れてくださ

い、

- 4) 次に出てくるのはアンケートです。今後募集してほしいようなテーマがあれば、ここに入れてください。また、今後動画も募集しようと考えています。それが提供される可能性があれば合わせてお願いします。
- 5) 「次へ」を押すと、いよいよ投稿のフォームが出てきます。前掲のテーマの中から適当なものを選んで、写真のタイトルを入力してください。また、撮影年月日、撮影場所（わからなければ空欄も可）も入れてください。
- 6) 次に検索に便利のようにキーワードの入力をお願いします。キーワードごとに改行すると、5個まで入力できます。
- 7) その次に出てくるのが写真の説明（200字以内）です。学名や和名、成長段階などを入れていただくと良いと思います。
- 8) その他の情報は、撮影機材や撮影の方法などです（空欄可）。
- 9) 最後に本写真が採択された場合の著作権関係の許諾についての質問に答えてください。3つの選択肢があり、それぞれの説明が下に出てきます。
- 10) いよいよ写真のデータをアップロードします。ファイルはドラッグ・アンド・ドロップあるいはファイルを選択することによって、アップロードできます。
- 11) 次に、さらに写真を追加するかを選択します（1回に10枚までアップできます）。2枚以上連続してアップする場合は、上の5)からの動作の繰り返しになります。
- 12) 追加がなければ、「次へ」を押し、送信ボタンを押して（ボタンを押すのを忘れないで押してください！）終了です。

4. アップされた写真は、筆者の他、白水貴、中島淳志、出川洋介、橋本陽、種山裕一の各氏からなる委員会で採否を判断し、菌学会のホームページから公開します。

本事業についてのご意見・お問い合わせは、細矢 (hosoya(at)kahaku.go.jp (at) を @ に変えてください) までお願いします。

皆様のご協力をお待ちしております。

E-mail: hosoya@kahaku.go.jp（細矢 剛）

会長退任にあたって

細矢 剛

(国立科学博物館 植物研究部)



この2021年度～2024年度の2期にわたる会長任期を終えることになりました。退任にあたって、この4年間で振り返りたく思います。

着任した2021年度は、コロナ禍真っ只中でした。そのため、学会活動をいかに維持するか、が大きな課題となりました。対面での会合が制限されていたため、リモート環境を整備し活用することを考えました。リモート会議システムのZoomが使用できるように整備し、従来の理事会に加え、リモートの形で理事が会合を行う「理事打ち合わせ」をほぼ毎月おこない、コミュニケーションの維持に努めました。また、時流に合わせ、クラウドでの作業や、資料の保存・共有をスムーズに行うため、「BOX」というクラウドストレージを導入しました。このシステムの導入は、散逸しがちな資料を集中的に扱うことができるため、デジタル化した資料の維持・管理には非常に便利なものと思います。今後の活用が期待されます。

2020年度には、前年度から準備を進めていた大会が中止となり、翌2021年度も引き続き大会開催を引き受けてくださった大阪市博を中心に、田中千尋前会長を委員長として、菌学会史上初めて大会がリモートで行われました。しかも、ほぼすべてを手弁当で賄ない、何もかも初めてという対応が迫られたことから、担当をされた国内集会理事や、現地の委員の方は本当に大変だったと思います。しかし、理事の皆様の献身的な努力によって、電子ポスターの事前視聴、ディスカッションを中心とした当日のライブ発表など、従来とは変わった非常によい大会ができたと思います。

続く2022年度もコロナ禍において、引き続きオンラインで大会が開催されましたが、前年の経験を活かして、外注や、急速に進展したクラウドベースのオンラインインフラもうまく使いながらよい大会となったと思います。この方法（「大阪モデル」とでもいいでしょうか）は、今後もいろいろなところで応用ができるものと思います。

リモート環境は、国際集会の開催上も有利に働きました。2021年度、2022年度の2回、リモートを活用し旅

費が不要という点を活かして、若手からの提案に基づく「サテライトシンポ」を企画しました。これは、提案者を主体として国際集会の運営を任せるという企画です。海外経験がある若手を中心に提案があり、興味深いテーマによるシンポジウムができたと思います。

菌類観察会（フォーレ）は2020年度・2021年度と中止となっていました。ようやく2022年度、八王子において都立大の協力を得て、日帰りの形で開催することができました。日帰りとはいえ、非学会員の方にも参加できるように配慮したのは特筆すべきことでした。

2021年度、学会にとってもう一つあった非常に大きな変化は、学会誌の印刷がElsevierから勝美印刷に変わったことです。国際的な出版社から国内の出版社に変わったことは日本語でコミュニケーションができるという大きなメリットがあり、J-Stageから全論文が無償でオープンアクセス公開されるようになったという点も大きな前進ではありましたが、その一方で、国際的な知名度が低下するリスクがありました。しかもElsevier社からは当初Mycoscienceの過去の論文を公開する権利が菌学会に移譲されなかったことから、論文の公開の点でも非常に大きなマイナスを背負うこととなりました。しかし、幸いなことに交渉の結果、Elsevier社からは過去の論文について無償譲渡を受けることができ、科研費を有効活用してメタデータなどの書式を合わせ、J-Stageから公開できるようになりました。その効果もあってか、Impact factorが上昇し、運営も徐々に軌道に乗ってまいりました。さらに、国際的な文献データベースPubMed Central (PMC) への収載にも成功し、国際的な知名度向上により一歩を踏み出すことができました。困難な時期に編集委員長を担当された玉井編集長にはこの場を借りて厚く御礼いたします。

2023年度、何人かの理事が入れ替わり、新しい体制のもとに、会長としての2期目がスタートしました。世間は相変わらずのコロナ禍ではありましたが、徐々に「コロナ慣れ」したためか、ハイブリッド集会も普通に行われるようになりました。コロナは5月にインフルエンザと同じ「5類」となり、ワクチンの普及とともに、危険

性の認識についても変わってきました。この期の大きな課題は、大会、フォーレの開催と Mycoscience の安定的な運営でした。体制としては前の期を引きつぎ、理事打ち合わせ会をリモートでほぼ毎月行いました。なお、前期も含めて組織としての意思決定は、適宜メール理事会を開催することによって行いました。定款・規程に記された意思決定には理事会の決議が必要なためです。

2023 年度の熊本大会では前年度の大阪モデルを活かし、対面の良いところも活かしたハイブリッド型の集会が企画され、成功裏に終えることができました。ただ、表立っては懇親会の開催が憚られるような状況ではありませんでした。

2024 年度の大会は、八戸において開催され、対面を中心としつつ、部分的なライブ配信も導入する形で行われました。「やはり対面がいい」、「懇親会ができて良かった」という声もあちこちから聞かれました。

国際集会にも活気が戻りました。すでに 2021 年 10 月には、韓国の KSM (Korean Society of Mycology) とは合同シンポを韓国で開催し、日本菌学会からも複数演者の招待がありました。2024 年 6 月にはカナダのトロントで開催された米国の MSA (Mycological Society of America) の大会に菌学会から 2 名を派遣し、合同セッションが行われました。これらの経緯の延長で 2025 年 5 月には両国との国際シンポジウムが千葉大会と連続で開催される予定です。

2023 年度のフォーレは、久しぶりに秋田県の乳頭温泉郷で宿泊を伴う形で、2024 年度には奈良県の近畿大学で日帰りの形でそれぞれ開催されました。後者の会では、カメラやポータブルのモニタなどが導入され、観察すべきところを具体的に示し、複数の人が共有するという試みが初めて行われました。新しい機器の導入は、教育上も有効に活用できるポテンシャルをもっています。今後の継続的な活用が望まれます。

Mycoscience の運営では、ページ制限を緩和することによって、投稿者の呼び込みを図りました。また、J-Stage data と提携することによって、同誌にデータペーパーとしての機能を付与することを図りました。このシステムはまだ本誌では本格的に稼動していませんが、今後活用されることによって、貴重な菌類についての科学データが維持・再利用され、活用されることを期待します。また、科研費の活用によって、バックナンバーの PDF 公開も順調に進められており、すでに 1992 年以降の日本菌学会会報の論文、2001 年から Mycoscience が公開されています。

また、2024 年度には、財団法人発酵研究所から、500 万円にも及ぶ助成金を得ることができました。この資金は、学会内の研究・教育・普及活動に役立てるべく、複数のプロジェクトが実施されています。

私が経験した 4 年間のうち、最初の 2 年間は対面での大会が実施されないという前代未聞の事態でしたが、この文章を書いている 2025 年 4 月現在には、再び活性が戻ってきている印象があります。しかし、ここでの活性はコロナ禍前と質的に異なるものです。いままで学会の活動拠点だった大学の役割も変容してきました。また、円安、物価高騰など経済的な環境も変わってきています。コロナ禍がもたらした新たなテクノロジーや習慣などを前提に、今後も日本菌学会が成長し、集いと議論、次世代の育成のために発展することを祈念します。また、この 4 年間大過なく過ごすことができたのは理事・評議員はじめとする会員の皆様のサポートのおかげであると思います。会員の皆様にも心より御礼を申し上げ、退任の挨拶に替えさせていただきます。

E-mail: hosoya@kahaku.go.jp (細矢 剛)

ABS の現場から一芽依と悠翔の実践記— その 1

寺嶋芳江

(静岡大学 /ABS 対応サポートセンター)



【この“ものがたり”掲載の趣旨】

生物多様性条約の発効（1993 年）と名古屋議定書の発効（2017 年）を受け、海外から日本へ研究サンプルを持ち込む際に ABS の手続きが必要なことは徐々に周知されてきました。しかし、ABS 対応は国によって異なり、実際にどのような手続きをとればよいかはよくわからない状態です。そこで、実際に ABS 手続きを経て日本へ輸入した事例をもとに、ABS 手続きの流れ、国内法の遵守などへの対応を理解していただけるよう、ものがたりを作成しました。今回は、微生物同定のためにスロベニアから土壌を輸入する話です。

=====



春の終わり、東京都内にある「ABS 支援センター」。住宅街の一角にあるこぢんまりとした事務所で、真弓芽依（まゆみ めい）は静かに一通のメールに目を通していった。芽依は 60 歳を迎えたばかり。元は国立大学で教鞭をとっていたが、退職後も生物多様性条約と名古屋議定書に基づく ABS（アクセスと利益配分）関連の知識と経験を活かし、遺伝資源の輸出入をめぐる支援業務を続けている。

芽依の車椅子のキャスターがわずかに音を立て、隣の机に座る青年に向き直る。

「悠翔（ゆうと）、ちょっと手伝って。新しい案件が来たわよ」

芽依の甥である指谷悠翔（さしや ゆうと）は、ラフなパーカー姿でノート PC の前にいたが、すぐに画面か

ら目を離した。20 代半ば、学校の勉強には関心を持たなかったが、社会の実務や法律、経済のしくみに興味を持ち、芽依の仕事をサポートするようになって 2 年目になる。

「今度はどんな話？」

「〇〇大学の A 先生から、スロベニアの大学から加工済み土壌を輸入したいという依頼。共同研究で微生物を調べるらしいの。だけどね・・・、この手の話は一筋縄ではいかないのよ」

悠翔は少し眉を上げる。

「土壌って、植物防疫法の輸入禁止品じゃなかったっけ？乾燥してもアウトの場合があるって・・・、前に言ってたね」

「そう。そしてもうひとつ、スロベニアは名古屋議定書の締約国ではないけれど、EU の一員だから ABS の規制がかかるの。私たちがやるべきことは、EU 規制とスロベニア独自の法令があるかの確認と、日本側の防疫対応。二重の調整が必要になるわ」

芽依は画面を悠翔に見せた。依頼内容は、微生物群を同定するために特定地域の土壌を日本に送付したい、というもので、すでに大学間で共同研究契約は結ばれていた。だが、ABS の確認と日本の防疫法への適合が済んでおらず、その実務を支援してほしいという依頼だった。

「じゃあ、まずは ABS クリアリングハウス^{*1}でスロベニアの NFP と EU 規則を確認するか」

悠翔はすばやくブラウザを立ち上げ、ABS クリアリングハウスを検索。スロベニアのナショナル・フォーカルポイント（NFP）^{*2} 情報と、EU 規則（EU No.511/2014、実施規則 2015/1866、ガイダンス 2016/C 313/01）を読み込んだ。

「EU の規則によると、研究助成を受けているプロジェクトには、Due diligence（適正な注意義務）を果たす必要があるらしい。つまり、ちゃんと合法に取得してるって証明が求められるね」

芽依は頷いた。

「じゃあ、スロベニアの NFP に PIC（事前の合意）と MAT（相互に合意する条件）が必要か、聞いてみましょう」

悠翔が英文で下書きを作成し、芽依が言葉のトーンを整えてから送信。だが、1 週間経っても返信はなかった。「こうなると、相手国の研究者経由で動くしかないわね」

芽依は日本の研究者 A に連絡し、スロベニア側の共同研究者に事情を説明してもらうようメール文を作成して依頼。数日後、相手国の研究者が自大学の法務部門に確認したが、やはり確たる答えは得られなかった。

「政府機関に直接聞いてもらいましょう。EU 法に基づく判断だから、大学レベルでは限界があるわ」

「そうだね」

悠翔がそう言って連絡を重ね、ようやくスロベニア語で書かれた NFP からの公式回答がメールで届いた。

「DeepL で翻訳・・・よし・・・、保護されている野生動植物ではなく、PIC や MAT は不要。今回の問い合わせが Due diligence の証明になるって明記されてる」

芽依はようやく笑みを浮かべた。

「これでスロベニア側の ABS 対応は完了ね。次は日本の法律、植物防疫法よ」

芽依は植物防疫所のウェブサイトにある申請手続きを確認した。「土壌は輸入禁止品に指定されていて、乾燥していても基本的に輸入は不可。でも、120℃ 以上の高圧滅菌か 500℃ の乾熱処理をしたものなら、許可されるのだけど」

「今回 A 先生は DNA を抽出するから凍結乾燥したいと言っていた。凍結乾燥では滅菌にならないよ。やっぱ、輸入禁止品の輸入の線だね」

輸入禁止品の輸入許可申請には研究の内容と動線を申請書に詳細に書く必要がある。二人は研究者 A の研究室を訪れ、詳しい説明を受けた。

次の日、芽依が過去の申請書と研究者 A からの聞き取りを参考にドラフトを整え、悠翔が研究者から得た情報をもとに、採取場所や土壌の種類、数量、梱包方法、保管場所などを表形式でまとめていく。

「悠翔、この梱包方法の記載、風袋も含めて重量を計算しておいてね」

「わかってる。念のため、実測値よりちょっと多めに申請しておくよ」

「すこしでもオーバーしていたら、廃棄されてしまうわ」

植物防疫所に申請書を提出した数週間後、研究者 A のもとの現地調査の日程が決まった。芽依と悠翔は立

ち会った。

検査官が訪れ、保管場所や研究室の滅菌設備を確認し、申請内容と照合した。

「この重量で本当に間違いないですか？風袋も含めてですか？」

「はい、全部含めた数字です」悠翔は自信をもって答えた。

9 月、研究者 A はスロベニアへ渡航し、現地で土壌を採取。凍結乾燥処理後、梱包されたサンプルは EMS で発送された。

「A 先生から連絡だ。追跡番号も確認済み。イエロータグ*3 はしっかり貼ってあるし、宛先は植物防疫所気付けにしてるよ」

10 月下旬、荷物は日本に到着し、無事に植物防疫所の検査を通過。届けられた箱には「輸入通知書」が同封されていた。

「これで輸入は完了ね。でも、まだ安心できないわ。今回の研究では DNA の抽出とシーケンスも行う。抽出核酸や PCR 産物も規制対象になるのよ」

「よし、外注先のシーケンス会社が検査済み施設か確認してみる」

悠翔が調査した結果、その会社はすでに植物防疫所に登録済みの施設であることが確認された。

11 月初旬、すべての手続きを終えたあと、日本の大学の研究者から一通のメールが届いた。

「すべて順調に進みました。真弓先生、指谷さん、本当にありがとうございました」

芽依はメールを読みながら、そっと眼鏡を外し、目元を押さえた。

「誰にも気づかれないような、小さな調整の積み重ね。でも、研究者の夢や努力を支えているのは、こうした裏方の作業なのよね」

悠翔はうなずきながら、次のメールを開いていた。

「さて・・・、次は◎◎◎国からの△△△の件だっさ。これはこれでややこしそうだな」

芽依は再び背筋を伸ばし、書類の山を片付け始めた。彼女と悠翔の“静かな実践記”は、まだまだ続いていく。

*1 ABS クリアリングハウス (ABSCH) : ABS (アクセスと利益配分) に関する情報を交換するためのウェブ上の情報機関

*2 ナショナル・フォーカルポイント (NFP) : ABSCH に掲載されている各国の政府連絡先

*3 イエロータグ:輸入禁止品の「輸入許可証」のこと.
地色が黄色のため, 俗称でこのように呼ばれることがある

=====

より詳細な情報については, こちらをご覧ください.

<https://terayoshi-gyosei.com/download/absreport1.pdf>

E-mail: terashima.yoshie@shizuoka.ac.jp (寺嶋芳江)

9 ～ 22 ページは『会員限定記事（印刷版限定）』

日本菌学会ニュースレター 2025-3 (7月)

日本菌学会ニュースレターは年4号発行され、学会会員と賛助会員まで送付されます。発行部数は1,300部です。また、常時投稿記事を募集しております。ご意見、ご不明の点などございましたら下記の編集委員までご連絡下さい。

日本菌学会ニュースレター編集委員長(2025-2026年度)
小泉敬彦 東京農業大学
tk208124@nodai.ac.jp

同編集委員

岩間杏美 菌類懇話会

anzutake85@gmail.com

服部友香子 森林総合研究所

hattori_yukako030@ffpri.go.jp

蓑島綾華 神奈川県農業技術センター

ayakaminoshima45@gmail.com

森谷千星 製品評価技術基盤機構

moriya-chise@nite.go.jp

吉田裕史 奈良先端科学技術大学院大学

yoshida.hiroshi@naist.ac.jp

一般社団法人日本菌学会会長(2025-2026年度)

玉井 裕(北海道大学)

〒060-8589 札幌市北区北9条西9丁目

副会長

服部 力(森林総合研究所)

理事

保坂健太郎(庶務担当;国立科学博物館)

矢島由佳(庶務担当;室蘭工業大学)

清水公徳(編集委員長;東京理科大学)

田中和明(日本菌学会会報編集責任者;弘前大学)

星野 保(国内集会・教育・企画担当;八戸工業大学)

白水 貴(広報・普及[HP]担当;三重大学)

深澤 遊(国際集会担当;東北大学)

糟谷大河(会計担当;慶應義塾大学)

日本菌学会ホームページ

<http://www.mycology-jp.org/>

速報性の必要なイベント情報の掲載などは学会ホームページ担当(secretary-general@mycology-jp.org)までお問い合わせ下さい。その他、学会運営等に関しては、上記まで適宜お問い合わせ下さい。

日本菌学会では、随時、会員を募集しております。広い意味での菌類(地衣、粘菌なども含む)に興味をお持ちの研究者ならびに愛好家の方など、どなたでもご入会いただけます。学会への入会方法は、ホームページをご覧ください。また、賛助会員についても募集しております。

編集後記

今回から初めて日本菌学会のニュースレターを担当させていただくことになりました。よろしくお願いします。私は10年ほど前から福岡県を中心に菌類活動をしています。菌類の知識は少ないものの、野外散策では様々な菌類を見つけてきました。これまで観察してきた菌類で一番思い出深いのは*Heterocephalum*属菌を見つけたことです。初めて見つけたのは一年の中で木々の樹形が美しく見える十二月。福岡ではこの時期枯葉の絨毯になっていますが、その落ち葉の隙間にとっても小さな籠状の子実体を作った*Heterocephalum*属菌が見つかりました。菌類を勉強し始めたときは、キクラゲが菌類であることを初めて知り、また野外散策では芝生に生えているきのこくらいしかわかりませんでした。今では「冬虫夏草類」「地下生菌類」「菌食生昆虫」など様々な分野に興味があり、現在でも時間があれば野外へ探しに行っています。しかし、人生は何があるかわからないもので今年は福岡を離れてお隣の山口県に拠点を移すことになりました。私にとっては未開の土地ですが、新しい土地でどんな菌類に出会えるのかとても楽しみです。

(編集委員 岩間杏美)

はじめまして。このたび、菌学会ニュースレター編集委員を務めさせていただくことになりました。森谷千星(もりや ちせ)と申します。今回は自己紹介ということで、カルチャーコレクションに就職して糸状菌の保存を担当することになり、2年前菌学会に入会させていただきました。しかし、微生物との出会いは遙か昔の中学生の頃に遡り、微生物は魔法使い?と思わせるような本に出会ったのがはじまりです。特に複数の微生物の能力を駆使した日本の酒や発酵食品は、微生物の存在が認識される前から行われており、小さな生物の巨大な力と先人の発想力に衝撃を受けたことを覚えています。その感動とノリで酒造りの研究の道に進んでしまい、100株以上の*Saccharomyces cerevisiae*と試験醸造の許された環境で、製麹、仕込に明け暮れる日々を過ごしておりました。*S. cerevisiae* 1種の多様性を追求していた自分にとって、多様な菌類の管理は美しいものから不気味なものまで見たことのない形態に驚かされ、さらに同じ条件で同じ挙動を示さないツンデレ具合にも驚かされ……。面倒くさい菌株ほど愛着が湧くようになってしまいました。カルチャーコレクションの一員として、日本の菌類研究の発展に少しでも貢献できるよう、精一杯努めてまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

(編集委員 森谷千星)

Volume 66, Issue 2 (2025)

Available online at: <https://www.jstage.jst.go.jp/browse/mycosci/-char/ja>

Contents

- | | | |
|-----------|---|---------|
| FP | New species of <i>Hymenagaricus</i> and <i>Xanthagaricus</i> (<i>Agaricaceae</i>), from Maharashtra, India
Prashant B. Patil, Sharda Vaidya, Satish Maurya, Nitinkumar P. Patil | 120–133 |
| N | A simple genotyping method for <i>RIM15</i> gene polymorphisms in sake yeast strains
Takashi Kuribayashi, Nanako Asahi, Hina Satone, Jumpei Tanaka, Masamichi Sugawara, Keigo Sato, Yoshihito Nabekura, Toshio Joh, Toshio Aoki | 134–137 |
| FP | Degradation of biodegradable plastics by phytopathogenic smut fungi
Yuji Aoki, Eiji Tanaka | 138–144 |
| SC | A new record of <i>Amanita sinocitrina</i> from Japan and a description of its ectomycorrhizae associated with Japanese red pine
Naoki Endo, Mitsuyo Nishimura, Taiga Kasuya, Ryo Sugawara, Kosuke Nagamune, Shuji Ushijima, Yoshihiro Takemura, Dai Nagamatsu, Akira Nakagiri | 145–154 |
| SC | <i>Microglossum capitatum</i> : taxonomy and conservation
Liu-Kun Jia, Zhu-Liang Yang | 155–161 |

RV Review

FP Full Paper

SC Short Communication

N Note

Volume 66, Issue 3 (2025)

Available online at: <https://www.jstage.jst.go.jp/browse/mycosci/-char/ja>

Contents

- | | | | |
|-----------|---|--|---------|
| FP | <i>Unguispora grylli</i> , a new species of amphibious fungi associated with crickets (<i>Gryllidae</i>), transforms attachment structures of sporangiola in the host gut | Tomohiko Ri, Yousuke Degawa | 162–170 |
| FP | <i>Neostagonosporella sasae</i> (<i>Phaeosphaeriaceae</i> , <i>Pleosporales</i>), a newly described species from bamboo leaves in Japan | Yudai Yamamoto, Takashi Shirouzu, Akira Hashimoto, Moriya Ohkuma | 171–179 |
| FP | <i>Cercospora hokkaidensis</i> : a novel species associated with leaf spot in sugar beet (<i>Beta vulgaris</i>) in Hokkaido, Japan | Roselyn Jove Uy, Hiroki Uda, Miyuki Kayamori, Chiharu Nakashima | 180–188 |
| SC | Community of arbuscular mycorrhizal fungi in a broad-leaved forest in the Fukiage Garden of the Imperial Palace, Tokyo Japan | Masahide Yamato, Yuka Nakazato, Ryota Kusakabe, Kentaro Hosaka | 189–194 |
| FP | Effects of different mycorrhizal types of dispersedly retained trees on the diversity of ectomycorrhizal fungi in neighboring <i>Abies sachalinensis</i> seedlings | Keisuke Obase, Satoshi Yamanaka | 195–200 |

RV Review

FP Full Paper

SC Short Communication

N Note

日本菌学会賛助会員

(株) 秋山種菌研究所

〒 400-0042 甲府市高畑 1-5-13
Tel 055-226-2331 Fax 055-226-2332

(株) キノックス

〒 989-3126 仙台市青葉区落合 1-13-33
Tel 022-392-2551 Fax 022-392-2556

(株) 千曲化成

〒 389-0802 千曲市内川 1101
Tel 026-276-3355 Fax 026-276-6182

TK 製薬 (株)

〒 337-0024 埼玉県さいたま市見沼区片柳 412-1
Tel 048-686-1828

(一財) 日本きのこ研究所

〒 376-0051 桐生市平井町 8-1
Tel 0277-22-8165 Fax 0277-46-0906

(株) 富士種菌

〒 400-0226 南アルプス市有野 499-1
Tel 055-285-3111 Fax 055-285-3114

ホクト (株)

〒 381-0008 長野市大字下駒沢 800-8
Tel 026-296-3211 Fax 026-296-1465

(株) 北研

〒 321-0222 栃木県下都賀郡壬生町駅東町 7-3
Tel 0282-82-1100 Fax 0282-82-1119

三菱ケミカル (株)

〒 227-8502 横浜市青葉区鴨志田町 1000
Tel 045-963-3601 Fax 045-963-3976

森産業 (株) 研究開発部

〒 376-0051 桐生市平井町 8-1
Tel 0277-22-8168 Fax 0277-40-1557

ユキグニファクトリー (株) 研究開発室

〒 949-6695 南魚沼市余川 89
Tel 025-778-0153 Fax 025-778-1282

(2025 年 6 月現在)

日本菌学会ニュースレター投稿票

メール本文または添付ファイルにて投稿票をお送り下さい。

題名：

投稿者名：

連絡先：〒

電話：

電子メール：

投稿区分（○で囲んで下さい）：資料 研究レポート 報告 紹介 随想 解説 書評 表紙写真（イラストも含む）
その他（ ）

その他、要望等：

※ご投稿いただいた記事は原則として、クリエイティブ・コモンズ表示・非営利（CC BY-NC 4.0）の条件下で掲載されます。ただし、著者全員の合意があれば、表示・非営利・改変禁止（CC BY-NC-ND 4.0）も選択できます。表示・非営利・改変禁止をご希望される場合は「その他、要望等」欄にその旨をご記入ください。

日本菌学会ニュースレター 2025 年 3 号

令和 7 年（2025 年）7 月 1 日

編集者 小泉敬彦

発行人 玉井 裕

印刷所 勝美印刷株式会社

〒113-0001 東京都文京区白山 1-13-7

アクア白山ビル 5 階

Tel. 03-3812-5201（代表）

発行所 一般社団法人 日本菌学会

〒113-0001 東京都文京区白山 1-13-7

アクア白山ビル 5 階